



デカルト

方法序説 省察 情念論

パスカル

パンセ プロヴァンシアル

野田又夫・榊田啓三郎・伊吹武彦
松浪信三郎・中村雄二郎 訳

世界文學大系

13

筑摩書房版

世界文学大系 13

デカルト
パスカル



昭和33年10月10日発行

定価 450 円

訳者	野村伊松中	田吹浪村	又三武三二	夫郎彦郎
発行者	古田	田		晁
印刷者	山元正			宜
発行所	株式会社	筑摩書房		

東京都千代田区神田小川町2-8
振替東京 165768 電話(29)局7651

目次

デカルト

方法序説

野田又夫訳 5

省察

榊田啓三郎訳 39

情念論

伊吹武彦訳 89

パスカル

パンセ

松浪信三郎訳 141

プロヴァンシアル

中村雄二郎訳 373

第一の手紙 第五の手紙 第六の手紙 第七の手紙 第十
一の手紙 第十二の手紙 第十八の手紙 第十九の手紙

年 譜	解 説	デカルト パスカルの『パンセ』	
	野 田 又 夫	T・S・エリ 青木雄造 訳	G・デ 土居寛之 訳
	463	455	446 433

装 幀
庫 田 發

デ
カ
ル
ト

方法序説

理性をよく導き、もろもろの学問において真理を求めめるための方法についての序説

第一部

この序説が長すぎて一気に読みとおせぬようなら、六部に分けてもよい。第一部では、もろもろの学問についてのさまざまな考察が示されるであろう。第二部では、著者が求めた方法のふくむおもな規則が示されるであろう。第三部では、著者がこの方法からとりだした道徳の規則のいくつかが示されるであろう。第四部では、著者が神と人間精神との存在を証明するに用いた諸理由、すなわち著者の形而上学の基礎、が示されるであろう。第五部では、著者が探求した自然学の諸問題の順序、および特に心臓の運動と医学に属する他のいくつかの問題との説明、さらにまた、われわれの精神と、動物の精神との間に存する相違、が示されるであろう。最後の第六部では、著者が自然の探求においてさらに前進するために必要だと考えるものは何であるか、かれに著述をさせた理由は何か、が示されるであろう。

良識はこの世で最も公平に配分されているものである。というのは、だれもかれもそれを充分に与えられていると思っていて、他のすべてなことでは満足させることにはなはだむずかしい人々でさえも、良識については、自分もっている以上を望まぬのが常だからである。そしてこの点において、まさかすべての人が誤っているとは思われない。むしろそれは次のことを証拠だてているのである、すなわち、よく判断し、真なるものを偽なるものから分つところの能力、これが本来良識または理性と名付けられるものだが、これはすべての人において生れつき相等しいこと。したがってわれわれの意見がまちまちであるのは、われわれのうちの或る者が他の者よりも多く理性をもつから起るのではなく、ただわれわれが自分の考えをいろいろちがった途によつて導き、また考えていることが同一のことでない、ということから起るのであること。というのは、よい精神をもつというだけでは充分ではないのであって、たいせつなことは精神をよく用いることだからである。最も大きな心は、最も大きな徳行をなしうるのと同時に、最も大きな悪行をもなしうるのであり、ゆつくりとしか歩かない人でも、もしいつもま

っすくな途をとるならば、走る人がまっすくな途をそれる場合よりも、はるかに先へ進みうるのである。

私はどうかといえば、自分の精神が、いかなる点でも、普通の人より完全であるなどと思つたことはない。それどころか、私はたびたび、ほかの人々のもっているような、すばやい考えを、はつきりしてまぎれない想像を、内容ゆたかな、またすぐに答えてくれる、記憶を、もつたいと望んだものである。そして精神の完全性をつくる性質としては、上の諸性質以外のものを私は知らない。というのは、「上に挙げなかつた」理性すなわち判断力のほうは、そのみがわれわれを人間たらしめわれわれを動物から分つところのものであるゆえに、めいめいに完全な形でそなわっていると、私は考えたいのであり、この点では哲学者たち(スコラ哲)の普通の意見に従いたいだからである。かれらの考へでは、同じ種(species)に属する個体(individuals)において、それらのもつるもろもろの偶有性(accidents)の間にのみ、より多いとかより少ないとかいうことが存するのであって、それら個体の形相(forms)すなわち本性の間には、多少ということとは存しないのである。

しかしながら私にははばかりなくいえることがある。それは、自分はいへん運がよかつたと思つている、ということだ。すなわち年少のところにはや、或る途を見つけ出し、それによつていくつかの見解と格率とに導かれ、これらか

私は一つの方法をつくりあげたのである。その方法というのは、それによって私の認識をだんだんに増し、少しずつ高めて、ついには、私の凡庸な精神と私の短い生涯とをもって私の認識が達しうる最高点にまでいたりする、と思われような、方法である。というのは、私はすでにその方法をもって幾多の成果を得ているのであって、たとえ私が自分について下す判断ではいつも自負よりはむしろ不信のほうへ傾こうとつとめているにせよ、また哲学者の眼をもって人みななささまざまな行動や事業をながめるときほとんどすべてが空しく無益なもののように私には見えるにせよ、真理の探求において私がすでに果したと考える進歩には、私はやはりこの上ない満足を感じざるをえず、未来に対して大きな希望をいだかざるをえないのであって、単なる人間としての人間の仕事(宗教以外)の中で、ましがよく善で有益なものが何かあるならば、それこそ私の選んだ仕事だ、とあえて考えるほどのだからである。

しかしながら、もしかすると、私はまちがっているかもしれない。私が金やダイヤモンドだと思っているものが、ひょっとすると銅やガラスのかけらにすぎぬのかもしれない。自分自身に関することがらについてはわれわれはまことに誤りやすいこと、また友だちの判断がわれわれにつごうのよいものである場合それはまことに疑うべきであることを、私は知っている。しかし私はこの序説において、私のとってきた

途がいかなるものであるかを示し、私のいままでの生活を、いわば一枚の画としてえがいて、めいめいそれについて判断してもらい、世間のうわさからそれについての人々の意見を知り、これを、自分を教育するための一つの新たな手段として、いままでつねに用いてきたものにつけ加えたいのである。

それゆえ私の企ては、各人がその理性をよく導くためにとるべき方法をここで教えようとするのではなく、ただいかなる仕方で私が自分の理性を導こうとつとめてきたかを示すだけのことなのである。他人に教訓を与える役を買って出る者は、教訓を与える相手よりも有能だと自任しているはずであり、もしかれ自身ほんの少しでも落度(おとち)があれば、そのため当然非難を受けねばならない。しかし私は、この書物(著書)の一つの歴史として、またはお望みならば一つの寓話として、示すだけであり、その中には模範として倣(なま)ってよいいくらかのこととともに、従わぬほうがよいと思われる多くの他のこともたぶん見いだされるであろうことはもちろん承知なのである、私はこれが、或る人々にとっては有益であつてしかもだれにも有害ではないであろうということ、か、すべての人が私の率直さを満足に思ってくれるであろうということを、期待するのである。

私は幼少のころから文字の学問で育てられ、それによって、人生に有用なあらゆること、明らかかな確実な認識を得ることができると言い

きかされていたので、それを学ぼうという非常な熱意をいだいていた。しかしながら、学業の課程を全部終えて、人なみに学者の仲間に入られるやいなや、私の考えは全く変つた。なぜなら私は多くの疑いと誤りとなやまされ、知識を得ようとつとめながらかえつていよいよ自分の無知をあらわにしたというほかには、なんの益も得られなかつたように思われたからである。しかしそうはいふものの、私がいたのはヨーロッパの最も有名な学校の一つ(ジュネーヴのライツェルン学院)であり、この地上のどこかに学識ある人がいるのならば、ここにこそいるはずだ、と私は思っていた。ここで他の人々の学ぶことはすべて私も学んだ。のみならず、教えられる学問だけでは満足せず、きわめて秘術的な、世の常ならぬものと考えられている学問(占星術、手相術、魔術のたい)を説いた書物でさえ、私の手に入れたかぎりのものにはすべて目を通した。なおまた私には、他人が私をどう評価しているかもわかつていたのであり、私の仲間の学生たちのうちには、私たちの先生のとつきに定められていた者もすでにいたのだけれども、そうかといって私が仲間より劣ると見られているとは思わなかったのである。そしてさらにつけ加えれば、われわれの時代は前のいかなる時代にも劣らずはなばなし時代であつて、多くのすぐれた人々を生み出しているのである。そこでこれら数々の理由から私は、自分自身をもにして他のすべての人のことを判断してもかまわぬ、また以前に人

から聞いて得たいと思つたような学問は、まだこの世の中に存在していなかつたのだと考へてもかまわぬ、という氣になつたのである。

しかしながら、それでも私は、学校でする勉強をやりたいせつだとは思つてゐた。私はよく心得てゐた——学校で学ばれる諸國語(ギリシヤ語・ラテン語)が古代の書物を理解するために必要であること。寓話のおもしろさは精神をよびます

ということ。歴史の物語る目ざましい出来事は精神を高めるものであり、慎重に読むなら歴史は判断力を養ふ助けとなること。すべての良書を読むことは、それらの著者であるところの、過去の時代の最もすぐれた人々との、いわば談話であり、しかもかれらがその思想の最上のものをわれわれに示してくれる、よく準備された談話なのであること。雄弁は比類ない力強さと美しさとをもつこと。詩はまことに心を奪うような、うまい着想とところよい文句とをもつこと。数学はきわめて巧みな工夫(ちゆう)の数々を示し、これらの工夫は、学問好きの人をよるこぼすためにも、またあらゆる技術を容易にして人間の労苦を減らすためにも、大いに役に立つこと。道徳を論じた書物は、教訓と徳のすすめとの多くをふくみ、これははなはだためになるものであること。神学は天国に至る道を教えること。哲学はあらゆることについてまことしやかな話をし、学浅い人々の賞賛を博する手段を与えること。法学や医学その他の学問は、それを学ぶ人々に名誉と富とをもたらすということ。そし

て最後に、これらの学問について、その最も迷信的で偽り(いつはり)多きものについてさへ、それらの正しい価値を知りそれらに欺かれぬようにするために、このようにすべてを吟味し終へたことは、無益ではなかつたということ。

しかしながら私は、諸國語を学ぶことに、また古い書物を読むことに、その語る歴史や寓話に、もはや充分な時を費した、と考へてゐた。というのは、前の時代の人々と語ることは、旅をする(たび)ことと、いわば同じことだからである。

〔旅に出て〕種々ちがつた國民の習俗のいくらかを知ることは、われわれ自身の習俗についていさう健全な判断を下すためにも、また物を見たことのない人がよく考へるようになるために、われわれのやり方に反することはすべて滑稽(ちやう)であり理性に反しているなどと、思わぬようになるためにも、有益ではある。けれども旅行に時を費しすぎると、けつきよく自分の國では他國者のようになつてしまふ。同様に過去の時代に行われたことがらにあまり興味をもちすぎると、いまの時代に行われていることがらに對しては、たいていきわめて無知な状態にとどまつてしまふものである。そのうえまた、寓話は、實際ありえぬ多くのことを、ありうるかのように想像させるし、また歴史はその最も忠実なものでさえ、たとえそれらが読みがいを増すために事物の価値を変えたり増したりはせぬとしても、少なくとも、比較的つまらぬ、あまりはえない事情は省略するのが、ほとんど常のことである。そこ

で、残りの部分は、そのあるがままの形で示されていけないことになり、歴史から得た模範によつて自分の行動を律する人々は、われわれの物語に出てくる騎士のような突飛(とつと)なるまいにおちいつたり、自分の力をこえたもくろみを心にいだくようになつたりしがちなのである。

私は雄弁をたいへん尊重し、詩には夢中になつてゐた。しかし私は両者がいづれも、學んで得られるものであるよりは、むしろ生れつきの才能である、と思つた。きわめて強い推理力をもち自分の思想を最もよく秩序づけて、それを明晰にかつ理解しやすくしうる人々は、たとえかれらがブルターニエ海岸の方言しか語らず、修辭學を一度も習つたことがなくとも、自分のべるところをいつも最もよく人々に納得させるるのである。そして最も人の氣に入る着想をもち、多くの美しい文句やうまい文句でそれを表現しうる人々は、たとえ詩學を知らなくとも、やはり最上の詩人であることに變りはないのである。

私はとりわけ数学が氣に入つてゐた。その推理の確実性と明証性とゆゑに。しかし當時はまだそのほんとうの用途をさとしてはいなかつた。そしてそれが機械的技術のみ役立てられてゐることを思つては、その基礎がこのようになつて動かぬものであるにもかかわらず、いままですの上にもっと高い建物をだれも建てなかつたことをふしぎに思つてゐた。数学とは反對に、私は道徳を扱つた古代異教徒た

ち(ストアの哲學者たち)の著書をば、砂と泥との上に建てられたにすぎぬ、きわめて豪華な壮麗な宮殿にたとえていた。かれらは徳を大いに賛美し、世のすべてのものより尊いものだと思わせる。しかしかれらは、いかにして徳を認識すべきかを、充分には教えてくれない。そして多くの場合、かれらが徳というりっぱな名で呼んでいるものは、冷酷あるいは傲慢あるいは親族殺し(ブルスィがわが子の死刑に立ち合つたなど)にすぎないのである。

私はわれわれの神学を尊敬していた。そして他のだれにも劣らず天国に至りたいと望んでいた。しかしながら、天国への道が、最も無知な人々にも、最も学識ある人々にも同様に、開かれているということを学び、かつわれわれを天国に導くところの、啓示された真理というものが、われわれの理解をこえたものであることを学んだ後は、それらの真理を私の弱い推理力によつて支配しようとは考えなくなった。それらの真理の吟味を企てて功を取めるには、神から与えられる異常な助力を必要とし、人間以上のものにならねばならないのだ、と考えた。

哲学については次のことだけ言っておこう。それが、幾代もの間に現われた、最もすぐれた精神をもつ人々によつて研究されてきたにもかかわらず、いまだに、論争の余地のない、したがつて疑いを容れる余地のないようなことがらが、何ひとつ哲学には存しないのを見て、私は自分がほかの人々よりもうまくやれるなどという自負心をもちえなかつたということ。そして同

一の問題については、真実な意見は一つしかありえないはずであるのに、事實はまことに多くのちがった意見が行われ、それがそれぞれ学識ある人々によつて主張されているのを見て、私は、真実らしくあるにすぎぬことがらのすべてを、ほとんど偽なるものと見なしたということ。

次に、その他の学問についていえば、それらは原理を哲学から借りているのであるから、あのようにあやふやな基礎の上には堅固な建物がたてられうるはずはない、と判断した。そしてそれらの学問が約束する、名誉も利得も、私をさそつてそれらを学ばせるには足りなかつた。

というのは、私は、ありがたいことに、自分の財産のついでを減らすために学問を職業としなければならぬような、境遇にあるとは感じなかつたからである。そして私はキュニコス派の哲學者にならつて名誉を軽んじて得々とすることはなかつたけれども、しかしにせもの本物と見せかけることによつてしか得られないと思われするような名誉を、重んずるなどということは決してなかつたのである。そして最後に、かのあやしげな学説はといえは、私はすでにその正体を知つていて、もはや錬金術士の約束によつても、占星術士の予言によつても、魔術師の幻術によつても、また自分の知らぬことまで知っていると言いたる者どもの手管やほら話によつても、欺かれる心配はないと思つていた。

こういうわけで私は、成年に達して自分の先生たちの手から解放されるやいなや、書物の学

問をまったく捨てたのである。そして、私自身のうちに見いだされる学問、あるいはまた世間という大きな書物のうちに見いだされる学問のほかに、もはやいかなる学問も求めまいと決心して、私は私の青年時代の残りを旅行に用い、あちらこちらの宮廷や軍隊を見、さまざまな氣質や身分の人々を訪れ、さまざまな経験を重ね、運命が私にさしたすいりいろな事件の中で私自身を試そうとし、いたるところで、自分の前に現われる事物について反省してはそれから何か利益を得ようとしてつとめたのであつた。というのは、めいめいが、自分にとつてはたいせつで、判断を誤ればすぐにその結果によつて罰せられるほかないようなことがらについて、なすところの推理の中には、學者が書齋で単なる理論についてなす推理の中よりも、はるかに多くの真理を見つけ出せると私には思われたからである(學者のもとする単なる理論は、なんの結果をも生まないものであつて、それが常識からかけ離れればいれはいるほど、それをまことらしく見せかけようとして、それだけ多くの機知と技巧を用いねばならなかつたわけだから、そこから學者がとりだす虚栄心の満足もまたそれだけ大きい、というほかに、なんの益をもかれにもたらさないものなのである)。かくて私は、私の行動において明らかに、確信をもつてこの世の生を歩むために、真なるものを偽なるものから分つすべを学びたいという、極度の熱意をつねにもちつづけた。

さて私が他の人々の行動を観察するのみであった間は、私に確信を与えてくれるものをほとんど見いださず、かつて哲学者たちの意見の間に認めたとほとんど同じ程度の多様性をそこに認めたことは事実である。したがって、私の人々の行動の観察から得た最大の利益はといえは、多くのことがわれわれにとつてはきわめて奇矯で滑稽に思われるにもかかわらず、やはりほかの国々の人によつて一般に受け入れられ認されているのを見て、私が先例と習慣によつてのみ確信するに至つたことがらを、あまりに固く信すべきではない、と知つたことであつた。かくて私は、われわれの自然の光(性理)を曇らせ、理性に耳を傾ける能力を減ずるおそれのある、多くの誤りから、少しずつ解放されていつたのである。しかしながら、このように世間という書物を研究し、いくらかの経験を獲得しようとして数年を費した後、ある日私は、自分自身をも研究しよう、そして私のとるべき途を選ぶために私の精神の全力を用いよう、と決心した。そしてこのことを、私は、私の祖国を離れ私の書物を離れたおかげで、それらから離れずにいたとした場合よりも、はるかによく果しえた、と思われる。

第二部

当時私はドイツにいた。そこでいまなお(三七年)終つていないあの戦争(一八一六—一八一七)に心ひかれて私はそこへ行つていたのである。そして皇帝の戴冠式(二六一九年)でドイツ皇帝ニコライ・アントン(二世)を見た後、軍隊に帰る途中、冬がはじまつて或る村にとどまることになつたが、そこには私の気を散らすような話の相手もおらず、また幸いなことになんの心配も情念も私の心をなやますことがなかつたので、私は終日炉部屋にただひとりと同じこもり、この上なくくつろいで考えたこととにふけたのであつた。さてそのとき考へた最初のことどもの一つは、多くの部分から組み立てられ多くの親方の手でできた作品には、多くの場合、ただ一人が仕上げた作品におけるほどの完全性は見られない、ということをいろいろの方面からよく考へてみようと思ひつたことであつた。たとへば、ただひとりの建築家が設計し完成した建物は、ほかの目的のために作られた古い城壁などを利用することによつて、多くの人の手でとりつくりわれて出来あがつた建物よりも、美しくまた秩序だつてゐるのが常である。同様にまた、はじめ城下町にすぎなかつたのが、時がたつにつれて大きな町となつたところの、あの古い都市は、ひとりの技師が平

野の中で思いのままに設計してつくつた規則正しい町にくらべると、たいていは全体のつりあいがとれておらず、なるほどその中の建物を一つ一つ別々に見れば、新しい町の建物に見られると同じくらい、あるいはそれ以上の巧みが見いだされはするけれども、しかしそれらの建物が、ここには大きいのが、あちらには小さいのが、というふうにならぬのを見、またそのために街路が曲りくねり高低(たかく)になつてゐるのを見ると、それらをそのように並べたものは、理性を用いる人間の意志であるよりはむしろ偶然である、と言いたくなる。しかしそれでも、私人の建物を町全体の美観に役だてるために監視する任務をもつた役人が、どの時代にもいたということと考えると、他人の作品に手を加へるだけでは、出来のよいものを作りだすことがむずかしい、ということとはよくわかるであらう。同様にまた私はこうも考へた、昔はなかば野蛮の状態にありそののち徐々にしか開化せず、その法律をば、犯罪や争いのわずらひに強いられるのみ作つてきた国民は、寄り合つた最初から、或る賢明な立法者の作つた憲法を守つてきた国民ほどには、よく治められてはありえないであらう、と。それは、神のみがもろもろの掟を命じたところの、眞の宗教のもつ体制が、あらゆる他の体制よりも、比較にならぬほどよく秩序づけられてゐるにちがいない、のと同様である。そして人間世界のことをいへば、スパルタがその昔大いに栄えたのは、その法律の一つ一つが

すくれているゆえではなく（それらの多くはきわめて奇妙なものであって、良俗に反してさきもいたから）、それらの法律がただひとりの手で作られたもの（*スリカルゴ*）であるために、すべての目的に向つていたからである。同様にしてまた私はこうも考えた、書物による学問、少なくともその推理が蓋然的であるにすぎず、私たちの論証をもたないところの学問は、多くのちがった人々の意見から少しづつ組み立てられ広げられてきたものであるから、良識あるひとりの人が、眼の前に現われることがらに關して、生れつきのもちまえてなしうる単純な推理ほどには、真理に近くありえない、と。同様にまた私はこうも考えた、われわれはすべて一人前の人間であるまゝに子供であつたのであり、長い間われわれの自然的欲望と教師とに支配されねばならなかつたが、これら二つのものはしばしば互に反対し合い、それらのいづれも、いつでも最善のものをわれらに選ばせたとはいえないのであるから、われわれの判断は、われわれが生れたはじめからわれわれの理性の完全な使用ができてきた理性によつてのみ導かれてきたとかりに考えてみた場合ほどには、純粹であり確實であることは、ほとんど不可能なのである。

町の建物を作りかえ街路をいつそうりつぱにしようという計画だけのために、あらゆる建物をとりこぼすなどということが見うけられないのは事實である。しかしながら、多くの人が自

分の家を建てかえるためにこぼさせることはよくあるし、家がひとりで倒れそうになつていたり土台が充分しつかりしていない場合には、とりこぼたざるをえぬことさえ時にはあるものだ。こういう例を考えて私は、次のような信念をもつようになつたのである。一人の人が、一國のすべてを土台から作りかえそれをいったんくつがえて建て直すというやうなやり方で、國を改革しようとする計画することは、まことに不当なことであり、またそれほどのことでも、もろもろの学問の組織を、あるいは学校でももろもろの学問を教えるために定められている秩序を、改革しようとするにせよ、一人の計画すべきことではないであらう。しかしながら私がいままで自分の信念のうちに受け入れたすべての意見に關しては話は別であつて、一度きつぱりと、それらをとり除いてしまおうと企てること、そしてそうしうえで再び、ほかのいつそうよい意見を取り入れるなり或いは前と同じ意見でも一度理性の規準によつて正しくとのえたうえでとり入れるなりするのが、最上の方法なのである。そしてこの方法をとることによつて私は、自分がただ古い土台の上に建てたにすぎなかつた場合よりも、また幼い時に教えこまれた諸原理のみを、それが真理であるかどうかいちども吟味せず、自分のよりどころとした場合よりも、はるかによく私の生活を導くことに成功するであらう、とかく信じたのである。なぜなら、この仕事においてもさまざま

な困難が認められはしたけれども、しかしそれらには対策がないわけではなかつたし、またその困難は、おおよけのことがらに關する、ほんのわずかな改革のうちにも見いだされる困難とは、比較にならず小さなものであるから。おおよけの組織という、これら大規模な建物のほうは、いったん倒されると、また建て直すことがあまりにもむずかしく、それどころかゆるうごかされてもちこたえるということさえむずかしく、その倒壊はまことにひどい結果を生まざるをえない。そしてまたこれら組織のもつ不完全性について考えてみると、いったいそれらが種々異なつた形をもつという事實がすでに、それらの多くが不完全性をもつことを思わせるに充分なのであるけれども、しかしいろいろ不完全なところはあつてもそれらは、明らかに慣習というものによつて、大いに和らげられているのである。のみならず慣習は不完全性の数々を知らずしらすの間にとり除いたり改めたりさえもしているのであつて、われわれが知恵をしぼつてもこううましくはゆかぬと思われるほどである。また最後に、そういう不完全性はたいていは建物の変革よりも辛抱しやすいものである。あたかも山々の間をうねりくねつて行く本道が、人の通るにつれて少しずつ平らに歩きやすくなり、近道をして岩をよじ上つたり崖の下まで降りたりするよりは、その本道を行くほうがはるかによい、のと同様である。

このゆえに私は、生れついた身分からいつて

も後に得た地位からいっても公事をつかさどることを求められてはいないのに、いつも頭の中で何か新たな改革を考えるをやめない、出すぎたおちつかぬ気質の人々を、どうしても是認しえないのである。そしてこの書物の中に、そういう愚かな考えを私がつもっているかと人に思わせるような点が少しもあると思つたのなら、私はこの書物の公刊をゆるすなどという氣に決してならなかつたであらう。私の計画は、全く私だけのものである土地の上に家を建てようとする以上には及んだことは決してない。私のやつたことが私には充分満足すべきものであつて、ここにその模型を讀者に示すとしても、だからといってそれに倣うことを人にすすめるやうとするつもりなのではない。神の恩寵をさらにゆたかにめぐまれた人ならば、たぶんもっと高い計画をいだくことであらう。しかし私は、私のこの計画でさえもすでに、多くの人にとつては大胆すぎるのではないかと危ぶむのである。以前に自分の信念のうちに受け入れたあらゆる意見を捨てようという決心だけでも、だれでもが倣つてよい例ではない。世間は、そういうことに全く適しない二種類の人々からのみ成つてゐるといつてもよいほどなのである。すなわちその一つは、自分を實際よりもずっと有能であると思ひこんでいて、何ごとについても早まつた判断を下すのを控えず、自分のすべての思想を順序正しく導くに足るだけの忍耐をもたぬ人々である。そういう人々は、いままで受けい

れた原理について疑い、普通の道から離れる、という自由をひとたび手に入れると、いっそうまっすぐに行くために取らねばならぬ小徑をも決してたどることができず、一生涯あちらこちらをさまよいつづけるであらう。第二は、自分たちが、真を偽から分つ能力において、自分たちを教へうる或る他の人々よりも劣つてゐる、と判断するだけの理性あるいは謙遜さをもつてゐる人々であつて、こういう人々は自分自身でいっそうよい意見を求めるよりは、他の人の意見に従ふことに、むしろ満足すべきなのである。ところで私のことをいへば、もし私がただ一人の先生しかもたなかつたならば、あるいはまたえらい學者たちの意見がいつの時代でも種々異なつてゐたのを知るに至らなかつたならば、私は疑いもなく第二の種類の人間に数えられたであらう。しかし私は、すでに学校時代に、どんな奇妙な信じがたいことでも哲學者のだからがすでに言つてゐるものだ、ということを知つた。またその後旅に出て、われわれの考えとは全く反対な考えをもつ人々も、だからといつて、みな野蠻で粗野なものではなく、それらの人々の多くは、われわれと同じくらいに或いはわれわれ以上に、理性を用いてゐるのだ、ということを確認した。そして同じ精神をもつ同じ人間が、幼時からフランス人またはドイツ人の間で育てられるとき、かりにずっとシナ人や人喰い人種(アマリ)の間で生活してきたとした場合とは、いかに異なつた者になるか、を考え、またわれ

われの着物の流行においてさえ、十年前にはわれわれの氣に入りまたおそらく十年たたぬうちにもういちどわれわれの氣に入ると思われる同じものが、いまは奇妙だ滑稽だと思われることを考えた。そしてけっきょくのところ、われわれに確信を与へてゐるものは、確かな認識であるよりもむしろはるかにより多く習慣であり先例であること、しかもそれにもかかわらず少し発見しにくい真理については、それらの発見者が一國民の全体であるよりもただひとりの人であるといふことのほうがはるかに真実らしく思われるのだから、そういう真理にとつては賛成者の数の多いことはなんら有効な証明ではないのだ、ということを知つた。こういう次第で私は、他をおいてこの人の意見をこそとるべきだと思はれるような人を選ぶことができず、自分で自分を導くといふことを、いわば、強いられたのである。

しかし私は、ただひとり闇の中を歩む者のやうにゆつくりと行こう、すべてに細心の注意をはらおう、と決心した。そしてそうすれば、たとえ少ししか進めなくとも、せめて倒れることだけはまぬがれるだろう、と考えた。のみならず私は、理性に導かれずに前から私の信念の中へはいりこんでいた意見のどれをも、はじめから一挙に投げすてようとは思わなかつた。それに先立ちまず充分な時間を費して、自分の企てる仕事の計画を立て、自分の精神が達しうるあらゆる事物の認識にいたるための、真の方法を

求めようとしたのである。

私はまだ若いときに、哲学の諸部門のうちでは論理学を、数学のうちでは幾何学者の解析と代数とを、少しばかり学んでいた。そしてこれら三つの技術あるいは学問は、私の計画にいくらか役立つはずだと思つたのである。しかしそれらを吟味してみると、まず論理学については、次のことが気づかれた。すなわちその示す三段論法やその他の教えの大部分は、ものを学ぶためによりはむしろ、すでに自分が学び知っていることを他人に説明するために、役だつてあり、あるいはまたかのルルスの術(ライムドック 三六一—三二五の術)のように、みずからの知らないことがらについて、なんの判断もせず、ただしゃべるといふために、役立つものである。そして論理学には実際きわめて真できわめて善なる多くの規則があふかれてはいるが、同時にそれと混ざつて、有害ないしは無用な多くの他の規則がそこにはあり、それらよいほうの規則をわるいものから分離することは、まだ荒削りもしてない大理石のかたまりからディアナーの像やミネルヴァの像を刻み出すこととほとんど同じくらいむずかしいのである。次に、古代人の解析(ギリシアの幾何学で主に作図法について、これに定めて、その条件)と近代人の代数(新たにアラビヤ人から定めて、やはり、求める量を既知と仮定して、方程式をつくつて進む方法)とについていえば、それらはいずれも、きわめて抽象的でないの役にもたためと思われる問題にのみ用いられているばかりでなく、前者すなわち古代人の解

析のほうは、つねに図形の考察に縛られていて、想像力を大いに疲労させることなしには悟性をはたらかせえないのである。また後者すなわち近代人の代数においては、人々は或る種の規則と或る種の記号とにひどくとらわれていて、それを、精神を育てる学問どころか、むしろ精神をなやますところの、混乱した不明瞭な技術にしてしまつていたのである。こうしたことからは、私は、これら三つの学問の長所を兼ねながら、その欠陥をまぬがれているような、何か他の方法を求めねばならぬと考へた。そしてたとえ法律が多くあることはしばしば悪行に口実を与えるものであり、国家はわずかの法律しかもたずしかもそれがきわめて厳格に守られている場合のほうは、はるかによく治まつているのであるから、私は、論理学を構成するあの多数の規則の代りに、たとえ一度でもそれからはずれまいという固い不動の決心をさへするならば、次にのべる四つの規則で充分である、と信じた。

第一は、私が明証的に真であると認めたいやうでなくてはいかなるものをも真として受け入れないこと。いいかえれば、注意ぶかく速断と偏見とを避けること。そして、私がそれを疑ういかなる理由もたないほど、明晰にかつ判明に、私の精神に現われるもの、以外の何ものをも、私の判断のうちにとりいれないこと。

第二、私が吟味する問題のおのをおの、できるかぎり多くの、しかもその問題を最もよく解決するために必要なだけの数の、小部分に分つこと。

第三、私の思想を順序に従つて導くこと。最も単純で最も認識しやすいものからはじめて、少しずつ、いわば階段を踏んで、最も複雑なものの認識にまでのぼつてゆき、かつ自然のままでは前後の順序をもたぬもの間にさえも順序を想定して進むこと。

最後には、何ものも見おとすことがなかつたと確信しうるほどに、完全な枚挙と、全体にわたる通覧とを、あらゆる場合に行ふこと。

幾何学者たちがかれらの最も困難な証明に到達するために用いるを常とする、全く単純な容易なるもの推理の、あの長い連鎖は、私に次のようなことを考へる機縁を与えた。すなわち、人間の認識の範囲に入りうるすべての事物は、同様な仕方で互につながつているのである。それら事物のうち、真ならぬいかなるものも真として受け入れることなく、かつそれら事物の或るものを他のものから演繹(えんぎ)するに必要な順序を常に守りさえするならば、いかに遠くへだつたものにもけつきよくは達しうるのであり、いかにかくされたものでもけつきよくは発見しうるのである、ということ。そしてこのときのようなものからはじめねばならぬかを探ねるのに、私はいはいて手間どらなかつた。なぜならば、私はすでに、それが最も単純で最も認識しやすいものからであることを知つていたから。そしてそれまでに学問において真理を探索したすべての人々のうちで、いくつかの論証を、すなわちいくつかの確実で明証的な推理

を見いだした者は、ただ数学者のみであったことを考へて、私は数学者が吟味したのと同じの問題をもつてはじめるべきだということに疑わなかつた。もつとも、私がそういう数学の問題から得ようとする期待したのは、私の精神がいづも真理を糧とし、偽りの推理には甘んじないという習慣を得る、ということだけであつたが。しかしながら、このように数学からはじめねばならぬといつても、私は、数学という共通の名によつて指示される数々の個々の学問のすべてを学ぼうと企てたわけではない。そして、これから学問の対象は種々異なつてはいるものの、それら学問は、対象において見いだされるさまざまな関係すなわち比例(原語は "rapports or proportions" は比例一というのでなく、順序関係と大小相等の量的関係の両方をさくめて、関係とか比例とかいふのである)のみを考察するという点において、すべて一致しているのを認めて、私は次のようにするのがよいと考へた。すなわち、これらの比例のみを一般的に吟味すること、しかもそういう比例の認識を私にとつていさう容易にするに役だつような対象においてのみ、その比例を想定すること、しかもまたその比例をいつまでもその対象にのみ結びつけておくのではなく、それが適合しうる他のすべての対象にも、後にいさうさうまく適用しうるようにすることである。次に、そのような比例を認識するためには、あるときはそれを一つ一つ別々に考察する必要がある、いかえればそれらの多くを一度に把握する、必

要があるだろうことに気づいたので、私はこう考へた。まず、それらを個別的に、いさうさうよく見るためには、私はそれらを線において想定すべきであること。なぜなら線以上に單純なものには私には見つからなかつたし、また線以上に判明に私の想像と感覚とに示しうるものはないからである。しかし次に、それら比例を心にとどめる、いかえればそれらの多くを一度に把握するためには、私はそれらを、できるかぎり短い或る種の記号によつて示さねばならぬこと。そしてこゝういふにすることに、幾何学的解析と代数とのあらゆる長所を借り、しかも両者のあらゆる欠点を矯正することになる、と私は考へた。

そして実のところ、遠慮なくいつてしまえば、私が選んだこれらわずかの規則を正確に守ることによつて、私は上の二つの学問の範囲にふくまれるあらゆる問題を容易に解く能力をわがものにしたのである。そしてこれらの学問を吟味するに費した二三月の間に、私は最も單純な最も一般的な問題から手をつけたのだが、私が一つの真理を見いだすと、それが必ずさらに他の数々の真理を見いだすための規則として役だつたから、けつきよく私は、以前たいへんむづかしいと思つていた多くの問題(三次四次の方程式などを解くことができたばかりでなく、最後に)は、私がまだ知らなかつた問題についてさえも、どういふにすれば、どの程度にまで、それらを解くことが可能であるかを、決定しうるよ

うに思われたのである。しかしこのようなことをいうといかにも私が、事実ありえぬことを誇大にいっているかのように思われるかも知れぬが、それがそうでないことは、次の点を考へて、おそらく認めてもらえるであらう。すなわち、一つのことについてはただ一つの真理しかありえないのであるから、その真理を見つけた人はだれでも、そのことについてはもはや人の知りうるかぎりのことを知つていたのであつて、たとへば子供が算術を心得ていて、その規則に従つて加え算を行なつた場合、その子供は、それが問題としてゐる数和については、おおよそ人間精神の見いだしうるすべてのことを見いだしたのだと確信しうるのである。といふのは、けつきよくのところ、眞実な順序を守り、かつ、求めるものあらゆる条件を正確に枚挙すべし、と教えるところの方法こそ、算術の規則に確実性を与えるところのすべてをふくむものなのである。

しかしこの方法が私を最も満足させた点は、この方法により、私はすべてにおいて私の理性を、完全にではなくとも、少なくとも私のできるかぎりにおいて最もよく、用いているのだと確信しえたことであつた。さらにまた、この方法を用いることによつて、私の精神がその対象をいよいよ明晰に判明に考へる習慣を少しずつ獲得してゆくと感じたことであり、また、その方法をなんらかの特殊な問題にかぎつたのではないゆゑに、それを代数の問題に用いた場合と

同様に有効に、他の学問の問題にも用いようと期待できたことである。しかしながら、だからといって私は、はじめから、そういう学問の提出する問題のすべてを残りなく吟味しようなどと企てたわけではない。というのは、そのようなことをすればそれこそ方法の命ずるところの順序に違反することになるからである。それら学問の原理はすべて哲学に由来するものであるはずであること、しかも哲学においては私はまだ何も確実なものを見いだしてないこと、に注意して、私は何よりもまず哲学において確実な原理をうちたてることにつとむべきだと考えた。そしてこのことは世に最も大切なことであって、しかもそれにおいては速断と偏見とを最もおそれねばならないのであるから、当時二十三歳であった私は、もっと成熟した年齢に至つたうえでなければ、そういうことの結着をつけようなどと企てるべきではないと考えた。そしてまた、私の精神から、それまでに受け入れていたあらゆる誤つた意見を根こそぎとりのぞき、かつ多くの経験を集めて、後に私の推理の材料となるようにし、また私がみずからに課した方法をいよいよしつかり身につけるためにそれを絶えず用いもして、あらかじめ多くの時を準備のために費したうえでなければならぬと考へた。

第三部

さて最後に、自分の住む家の建て直しをはじめるに先立って、それをこぼったり、建築材料や建築家の手配をしたり、自分で建築術を学んだり、そのうえもう注意ぶかく設計図が引いてあったりする、というだけでは充分でなく、建築にかかっている間も不自由なく住めるほかの家を用意しなければならぬのと同様に、理性が私に対して判断において非決定であれと命ずる間も、私の行動においては非決定の状態にとどまるようなことをなくするため、そしてすでにその時からやはりできるかぎり幸福に生きるために、私は暫定的に或る道德の規則を自分のために定めた。それは三つ四つの格率からなるものにすぎないが、それらを読者にも伝えたい。

第一の格率は、私の国の法律と習慣とに服従し、神の恩寵により幼時から教えこまれた宗教をしつかりともちつづけ、ほかのすべてのことでは、私が共に生きてゆかねばならぬ人々のうちの最も分別ある人々が、普通に実生活においてとっているところの、最も穩健な、極端からは遠い意見にしたがって、自分を導く、ということであった。というのは、いまや私自身の意見をすべて吟味にかけようとして、それらはも

はやなんの価値もないと見はじめているのであるから、最も分別ある人々の意見に従うのが最もよいと信じたのである。そしてベルシア人やシナ人の間にも、われわれの間においてと同じく、分別ある人々がたぶんおるであらうけれども、やはり、私が共に生きねばならぬ人々の考へに従って私を律することが最も有益である、と思われた。そしてまた、それら分別ある人々の意見が、真実にはどういふものであるかを知るためには、かれらが口にするところよりむしろかれらが実際に言うところに注意すべきであると思われた。これは、われわれの道德が頹敗して、みずから信ずるところをすべて口に出そうとする人はほとんどなくなっている、という理由によるばかりでなくて、いったい多くの人は自分が信ずるところを自分でも知らない、という理由にもよるのである。というのは、人が或ることを信ずるときの思考のはたらきは、自分が或ることを信ずるときの思考のはたらきとは、異なるものであって、前者が後者をともなわぬことはたびたびあるからである。さらに私は、ひとしく世に受けいれられている多くの意見のうちでは、その最も穩健なもののみを選んだが、これは、一つには、あらゆる極端は悪いものであるのが常であつて、どのような場合にも穩健な意見のほうが実行するにいつそう便利でありおそらくいつそう善いものであるからであり、また一つには、私がまちがう場合にも、穩健な意見をとっているほうが、